

俳句をつくらう

①家庭や学校で、また、遊びや通学のとちゅうでふと気づいたこと、季節の変化など自由にメモしてみよう。

※心の動きから俳句は生まれてきます。自分の身のまわりにある風景や、小さなもの一つ一つにも心をとめて、じっくり見てみましょう。きつと、今まで気づかなかったことが見えてくるでしょう。

月 日	こんなこと見つけた	こんなこと思った	季節のことは
/			
/			
/			
/			
/			
/			

月 日							
こんなこと見つけた							
こんなこと思った							
季節のことは							

②メモの中から特に印象に残った事を題材にして短い文章にしてみよう。

※自身自身の気持ちを感じと見つめてみましょう。

「うれしい」、「悲しい」、「楽しい」、「さびしい」などいろいろな気持ちがあると思います。どうして「うれしいのか」、「何が「悲しいのか」を考えてみることによって、今まで知らなかった自分を見つけていることができるでしょう。

Blank writing area with vertical dashed lines.

③作文の中から詩を作るのに必要

なことばをぬき出そう。

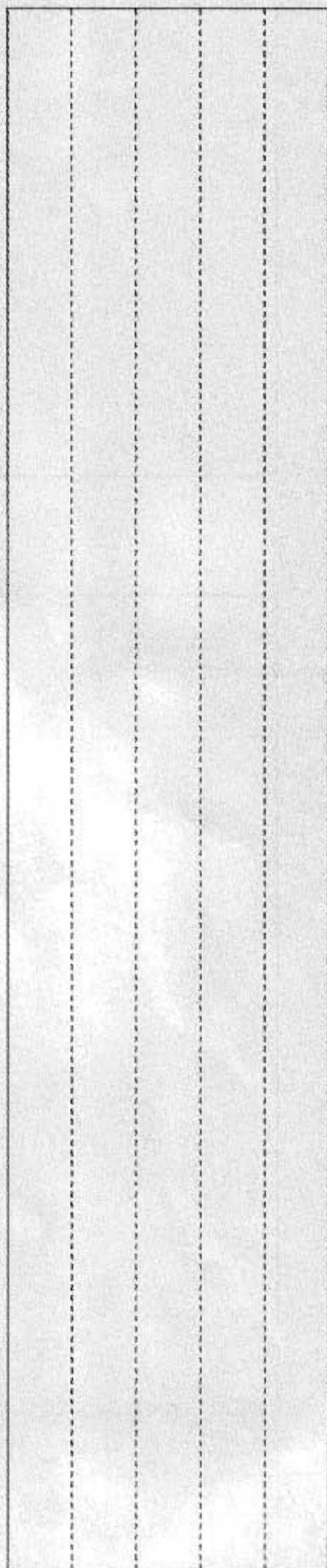
Blank writing area.

④ぬき出したことばやメモの中の季節のことばをつなげて、自分の書き

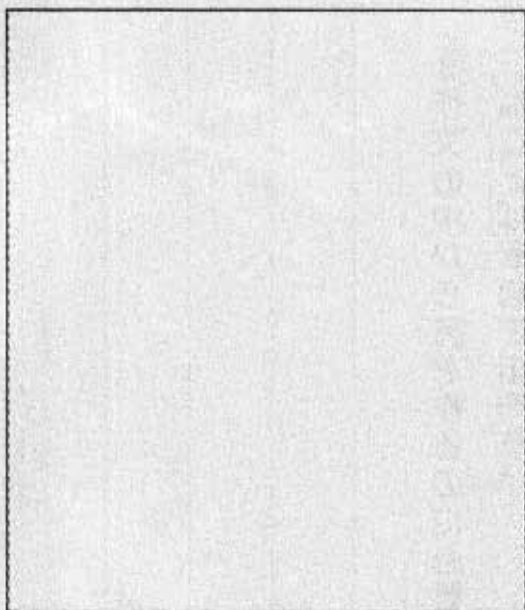
たいことを詩にしてみよう。

Blank writing area.

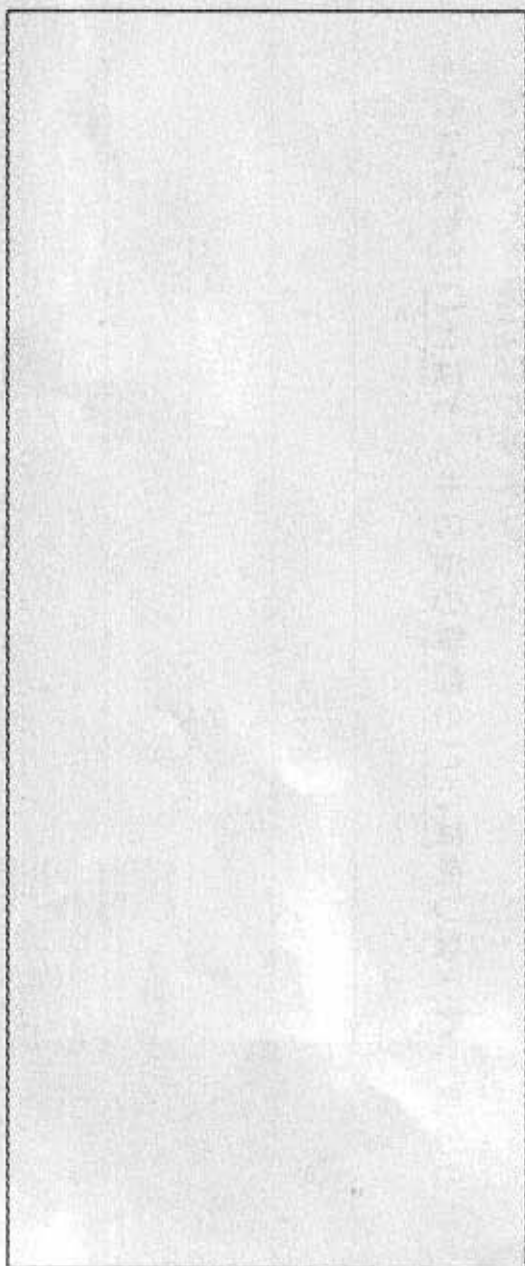
②メモの中から特に印象に残った事を題材にして短い文章にしてみよう。



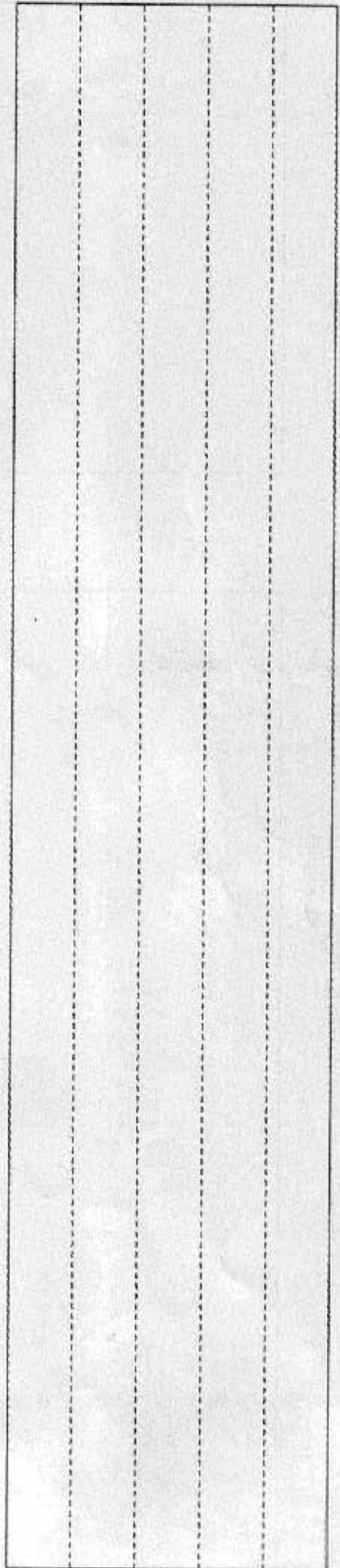
③作文の中から詩を作るのに必要なことばをぬき出そう。



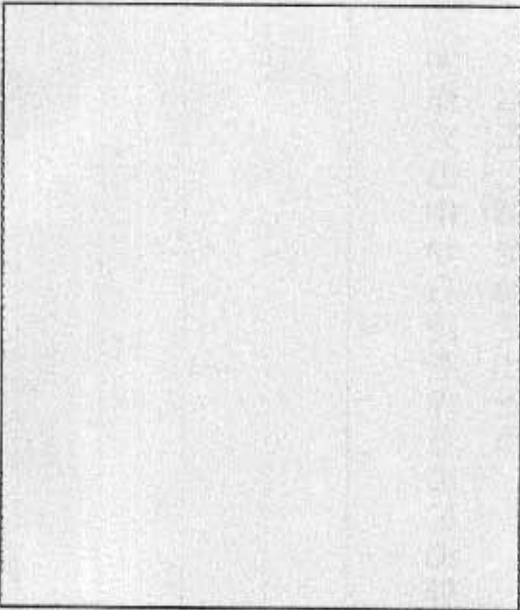
④ぬき出したことばやメモの中の季節のことばをつなげて、自分の書きたいことを詩にしてみよう。



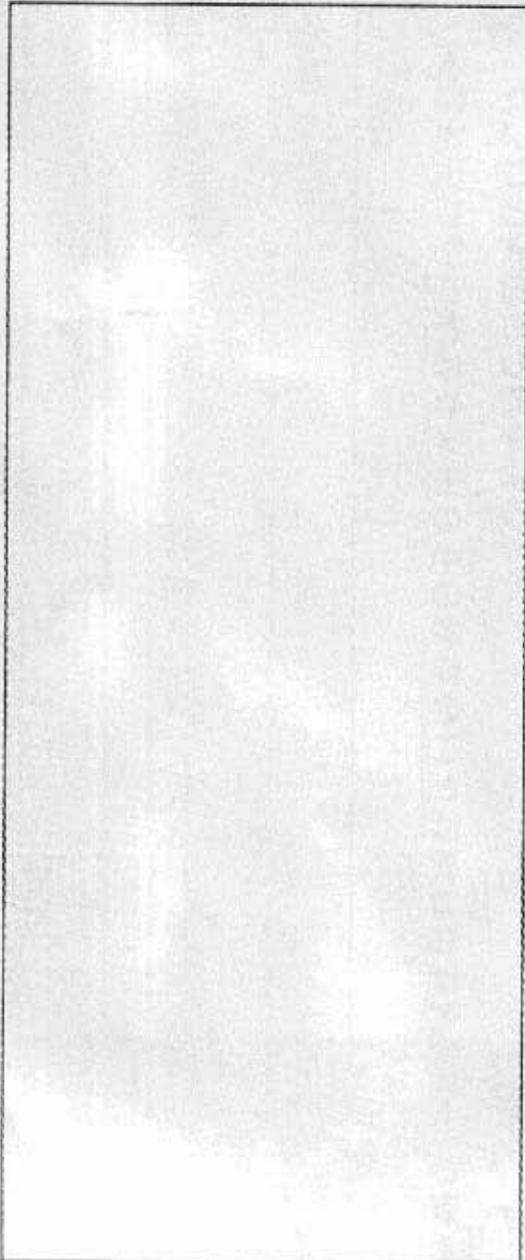
②メモの中から特に印象に残った事を題材にして短い文章にしてみよう。



③作文の中から詩を作るのに必要なことばをぬき出そう。



④ぬき出したことばやメモの中の季節のことばをつなげて、自分の書きたいことを詩にしてみよう。



⑤ 季節のことばを使って五・七・五の俳句にしてみよう。

※自然や身の回りの様子でおどろいたり感動したこと、うれしい・悲しい・楽しい・さびしい・せつない・つらいなどと感じたことを、そのまま五・七・五の言葉にしてみよう。

--	--	--	--

俳句にはどんな「きまり」があるのだろうか

① 五・七・五の十七音にまとめることが、いちおうのきまりになっています。ただし、どうしても十七音よりふえてしまう(字あまり)、十七音に足りなくなってしまう(字たらず)というような場合もよいと考えられています。

② 「季語」という、季節を表す言葉を必ず入れることになっています。

四季の移り変わりがはっきりした日本。そこで生活する人々が、自然に関心を持ち、季節の変化を楽しむ生き方の中から生み出してきたものが俳句なのです。

「季語」には「夕立」や「雪」など気候を表す言葉のほか、「お年玉」、「アイスクリーム」といった生活の中の言葉、また、「桜」や「蝉せみ」などといった植物、動物などたくさんのものがあります。

このような季語を集めたものを「歳時記(さいじき)」といいます。この本にもそのうちの一部がのっています。自分で俳句を作るときに使ってみましょう。

また、ワークブックのメモに書き込んだ季節のことはあつめて、みなさんの学校や学級オリジナルの歳時記を作ってみるのも楽しいですよ。

季節のことはあつめて自分の歳時記を作ってみよう

冬	秋	夏	春	新年
季節のことば				

みんなの俳句

うらやまがはちきれそうなせみのこえ

なかにしこのみ

「家のうらにある山にせみの声がいつぱいに響いています。夏の盛りをせいっぱい鳴き続けているそのこえを、作者は「はちきれそう」と表現しています。その音が聞こえてきそうですね。」

トロッコのすずしい風にぼうしぬぐ

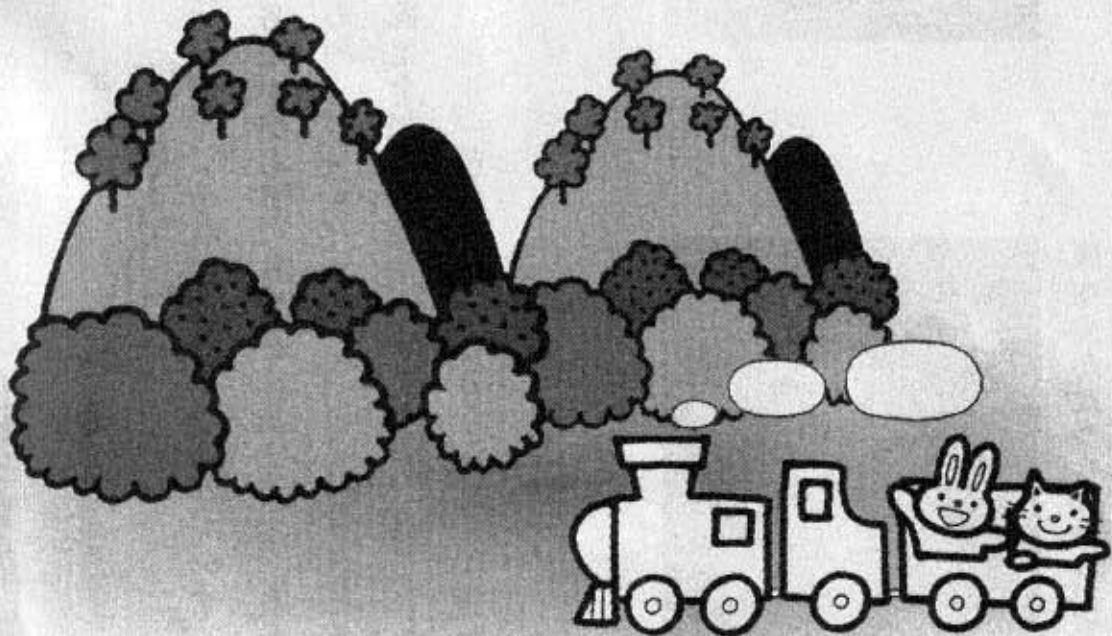
中野晶太

「旅先でトロッコに乗ったとき、かぶっていたぼうしをぬぎたくなりました。すずしい風が、少し汗ばんだ頭や顔に気持ちよくあたります。夏の山の緑の中をトロッコが進んでいく様子と、さわやかな風を楽しんでいる作者の様子が目にうかんできます。」

オカリナの音は月夜にあうのです

渡辺仁美

「まん丸のお月様がゆったりと空にかかっています。すみきった空気の静かな夜。こんなきれいな月夜には、いつか聞いた、やさしく温かいオカリナの音がびったりだと思っただけですね。」



三重の俳人

俳句というと、すぐに思いうかぶ人物として松尾芭蕉まつお ばしやうがあげられます。芭蕉は、今から三五〇年ほど前（江戸時代）、伊賀上野に生まれました。伊賀上野の侍大将だった藤堂新七郎家とうどう しんしちろうけに仕え、そのころから俳句の勉強を始めたようです。後に、江戸（今の東京）に出て、本格的な俳人（専門的に俳句を作る人）としての道を歩むことになりました。そして、五十一才で亡くなるまでに、それまでは、おかしさやこっけいさをよんだものであった俳句（当時は俳諧はいかいと呼ばれていました）を芸術性の高いものとするとともに、多くの弟子を育てました。また、日本の各地を旅して、俳句を広めました。有名な「奥の細道」は、芭蕉が紀行文（旅の見聞や印象を綴つづったもの）として残したものの一つです。まさに、松尾芭蕉は三重県が生んだ日本を代表する俳人であるといえます。また、松尾芭蕉の句を刻んだ句碑は全国各地に見られますが、県下にも多くの句碑が建てられ、人々に芭蕉をしのばせています。今も上野市や伊賀町では、毎年、芭蕉を記念するもよおしが行われ、世界の各地から俳句が寄せられています。



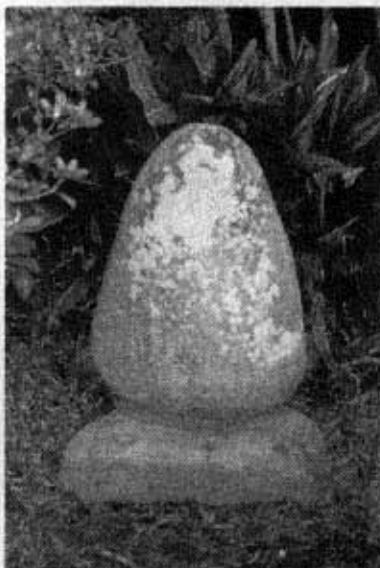
からかさにおし分わか見たる柳やなぎ哉かな

（阿山郡大山田村須原 大橋たもと）



蓬菜ほうらいにきかはや伊勢の初はつだより

（津市大門町 大宝院内）



雁かりゆくかたやしろ子若松

（鈴鹿市中若松町 緑芳寺境内）

※発句に続けてよむ付句の句碑で、芭蕉の句碑としてはめずらしいものです。

ところで、三重県が俳句の発展に大きく関わっているのは、芭蕉がいたからだけではありません。芭蕉が登場するさらに一〇〇年以上も前（室町時代）、まだ、俳句が独立したものでなく、連歌（句を連ねていくもの）の中の遊びの一種として、主に、貴族や武士と呼ばれる人たちの間で流行していた頃、伊勢神宮の神官であった荒木田守武は「守武千句」で俳句を文芸として価値の高いものとなりました。江戸時代になると、伊勢の地は、神宮参拝に訪れる人たちで、人の行き来が盛んになり、中央の文化が流れ込み、文化の水準も高まって、文化発信の地になっていったと考えられます。こうして、守武以来の伊勢俳句もその後の俳句の歴史に大きな影響を与えました。芭蕉も伊勢俳句に心をひかれていました。芭蕉が亡くなると、俳句は芭蕉風のものを中心となり、三重県の各地でいろいろな人々が芭蕉風の俳句を受けつぎました。



荒木田守武



松尾芭蕉

松尾芭蕉・荒木田守武の絵は（康工編「俳諧百一集」）という本にかかれています。

桑名の雲裡坊杉夫、四日市の西村馬曹・燕説、神戸城主であった鈴鹿の本多清秋、津の二日坊宗雨、松阪の森川滄波、伊勢の岩田涼菟・中川乙由・三浦栲良など三重県では有名な俳人たちが生まれ、たくさんのおおさんのすぐれた俳句を作りました。なお、松阪の大淀三千風は芭蕉と同時代の俳人で、芭蕉とはちがう、古風な俳句を作って有名になりました。

芭蕉さんの旅

芭蕉さんは何度も旅をして、いろいろな場所で、その地方の様子や旅の感動を俳句とともに、旅の日記ともいえる「紀行文」にまとめました。

中でも「奥の細道」は五ヶ月間（約二四〇〇キロメートル）にわたって、奥羽・北陸地方を中心に大旅行をした時の「紀行文」で芭蕉さんの代表的な作品です。作品は大垣で終わっていますが、芭蕉さんは、その後伊勢に向い、郷里の伊賀上野にも一時、足をとどめました。

次の俳句は、その「奥の細道」の中でも、特によく知られたものです。

- ① 行く春や鳥啼魚の目は泪なみだ
- ② あらたうと青葉若葉の日の光
- ③ 五月雨ふりの降ふりのこしてや光堂
- ④ 夏草くさや兵共つわものどもが夢の跡
- ⑤ 閑しずかかさや岩にしみ入る蝉せみの声
- ⑥ 五月雨をあつめて早し最上川
- ⑦ 象潟きさかたや雨に西施せいしがねぶの花
- ⑧ 暑き日を海に入れたり最上川
- ⑨ 荒海や佐渡によこたふ天河あまのがわ
- ⑩ 蛤はまぐりのふたみに別れ行く秋ぞ

- (千住)
(日光)
(平泉)
(平泉)
(平泉)
(立石寺)
(最上川)
(象潟)
(酒田)
(越後路)
(大垣)

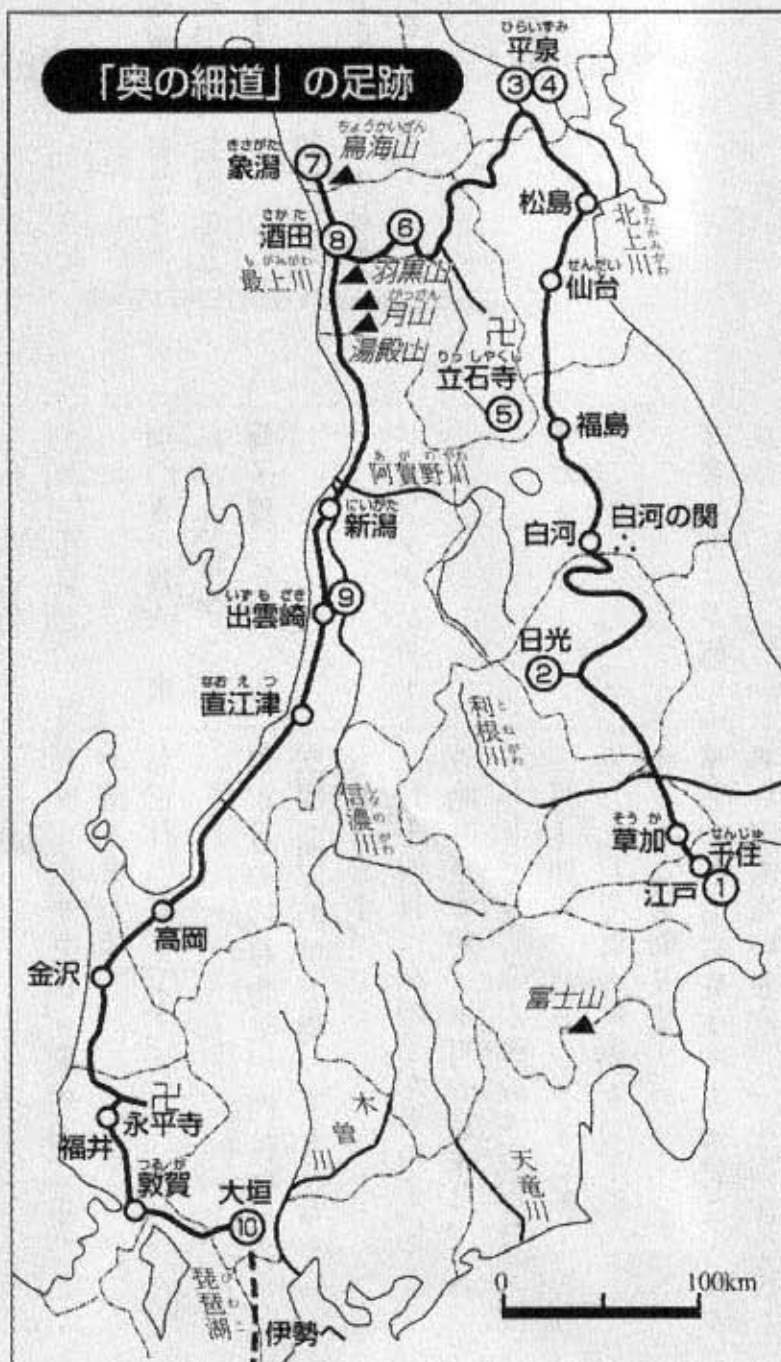


芭蕉旅姿



俳聖殿

(三重県上野市丸之内上野公園内)



※右ページの俳句は地図の中に示された番号のあたりで作られました。

新年(一月)・春(二月〜四月)

新年・正月・初春
元日・元旦・三が
日・松の内

初詣・破魔矢

節分・豆まき・初
午・年の豆

雛・雛祭り

月名(旧暦名)：睦月、一月

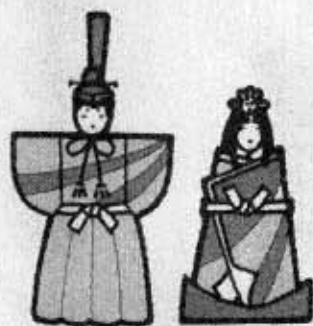
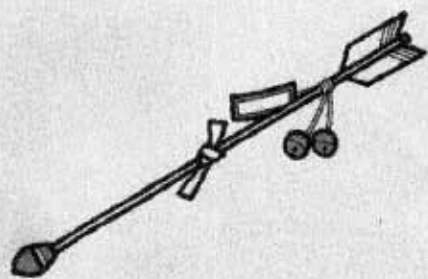
一年の初めの月を「新年・正月・新
春」といい、一月一日を「元日」、元
日の朝を「元旦」といい、一日から
三日までを「三が日」あるいは「松の
内」といいます。

元日に神社仏閣にお参りすることを
「初詣」といい、そこで買う矢のこ
とを「破魔矢」といいます。

立春の前夜で、二月三日、四日ごろ
に当たり、新しい春を迎え、幸せを
願い、豆をまく風習をいいます。
三月三日、桃の節句。

お正月しし笛ひびく母の里

北川裕大



年賀・賀状

年玉・初売り・
書初・稽古始

門松・しめ飾り

羽つき・双六・風

あげ・歌留多・こま
獅子舞

バレンタインデー

ホワイトデー

卒業・サイン帳
入学

「三が日」に親戚や知人などがお互いに
訪問し合い、挨拶することをいいます。
お正月の楽しみの一つですね。

新年、門や玄関、床の間、車などに
お飾りをします。
お正月の遊びです。

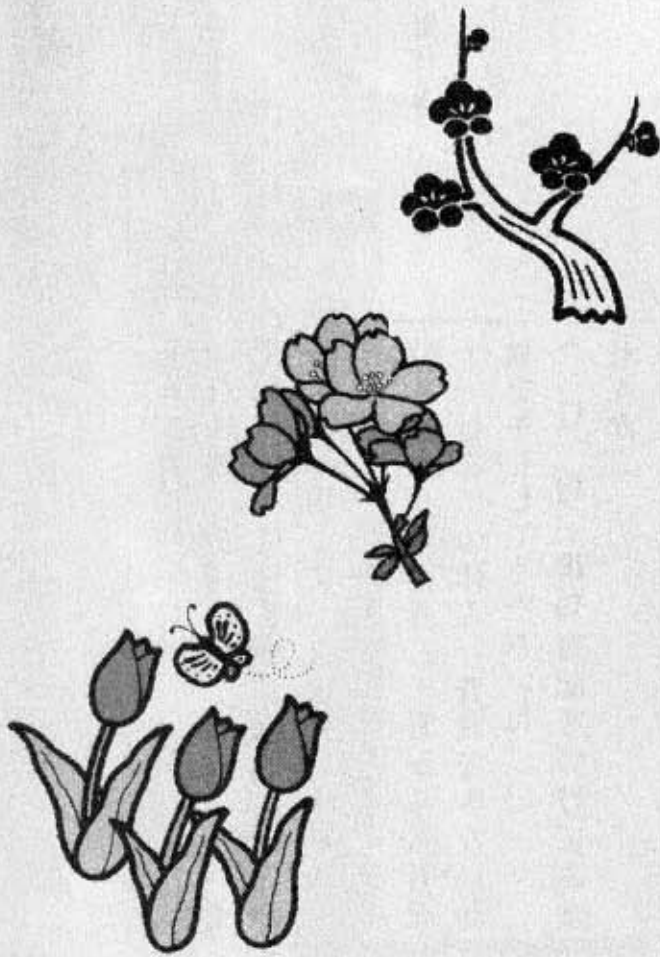
お正月の縁起物で、門付けといい、
玄関(門)の前で舞ってもらうところ
もあります。

二月十四日。女の子が男の子にチョコ
を贈りますが、本当の意味は、「セン
トバレンタイン」が殉教された日です。
三月十四日。バレンタインデーのお
返しとして男の子が女の子に、クッ
キーなどを贈ります。
卒業の記念に先生や友達にことばを
書いてもらいます。一生の記念にな
りますね。

先生を見おくりに行く春の雨

波多美幸





菜の花やだんだん海が狭くなる

石川 育美

桜

梅 (紅梅・白梅)

初蝶

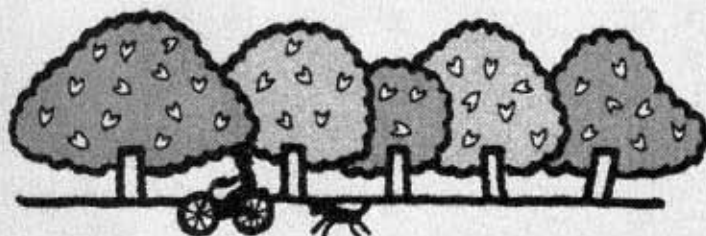
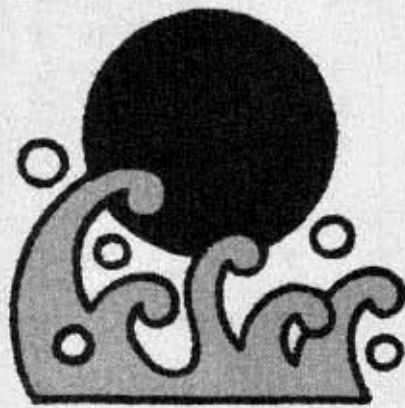
蝶・白蝶・黄蝶・

燕

燕は、春来て秋帰る渡り鳥。子育てする姿がいじらしいです。花の上を飛びかう姿は、春らしいです。ね。

桜と並んでなじみが深く、早春他の花に先がけて咲くので、「花の兄」と呼ばれています。梅という実ではなく、花をさします。

日本の代表的な木で、国花にも指定されています。満開時も散り際もとてもきれいです。俳句では、花といっただけで桜を意味します。



春一番旅出て一つしあわせが

杉田 紋佳

初日・初日の出

春風

春一番

風光る

元旦の日の出のことをいいます。春に吹く暖かく柔らかな風。新芽が吹き出しそうです。ね。

春になって最初に吹く強い南風のことです。

春も日光が強くなり、夏に近づくと、吹く風が鋭く光るように感じられます。

夏(五月〜七月)

入梅・梅雨・梅雨
明け

夏休み

立春から百三十五日目、六月十一、二日ごろ。梅雨に入ることはいいます。一か月近くじめじめとした雨の季節が梅雨です。入梅後三十日の七月十日ごろ、梅雨が明けます。待ちに待った七月二十日から八月三十一日までの休み。普段できない体験を多くしてくださいね。(一日一句、俳句日記をつけてみましょう。)

風鈴の窓先生に手紙出す

別所奈織



夏登山知らぬ誰かと友達に

東未裕

端午の日・子ども
の日・武者人形・
鯉のぼり・吹き流
し・粽・菖蒲湯
山開き・海開き・
キャンプ・ボート
登山・プール・海
水浴・水遊び
みつ豆・氷水・サ
イダー・アイスク
リーム・ソーダ
水・ラムネ

五月五日は端午の節句です。鯉のぼりや吹き流しをあげ、武者人形を飾り、子ども達の健康と成長を願います。夜は、菖蒲湯につかります。自然の中で思う存分楽しみましょう。楽しい遊びがいっぱいです。

暑いときには、冷たい物がほしくなりますね。
(他にどのような食べ物があるでしょう。さがしてみましよう。)



天道虫・兜虫・くわがたむし・蟻・蟻地獄
 火取り虫・蟬・蚊
 おけら

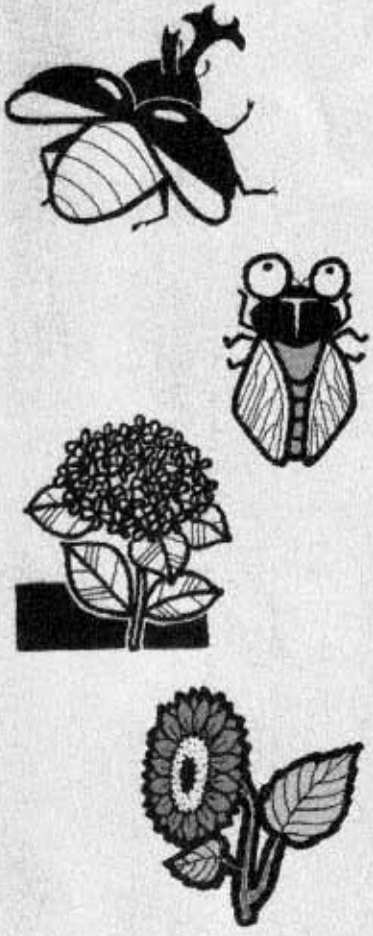
薔薇・牡丹・桐の花・けしの花・柿若葉・卯の花・麦花菖蒲・かきつばた・蜜柑の花・栗の花・くちなしの花・紫陽花・向日葵・浜木綿・睡蓮・すもも松葉牡丹・百日草はまなす

火取り虫は、灯火に集まってくる虫。蚊は、血を吸うのが嫌です。
 (他にも夏の虫や動物をさがしてみましよう。)

牡丹は美しい大型の花です。柿の若葉は、つやつやした葉で、時に光って見えます。路(ふき)は、ほろ苦く香りがいいので食用にします。五月ごろ白い花を小枝にびっしりつける卯の花、旧暦四月を卯月というのは、ここからきています。独特の青臭い匂いがするのが栗の花です。

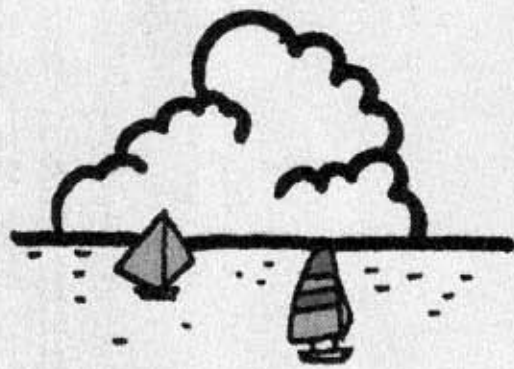
さるすべり雨に紅ましにけり

岡本恵里



虹
 夕焼け

夕立の後、空に大きくかかる姿が美しいですね。
 夕焼けの次の日は良く晴れるそうです。



秋（八月～十月）

お月見・中秋の名月

十五夜

秋分の日

体育の日

旧暦の八月十五日をさします。団子とススキを供える風習もあります。

秋彼岸の真ん中（お中日）。

体育の日（十月十日）は、一九六四年に日本（東京）で初めてオリンピックが開催されたことを記念して作られた休日です。オリンピックになんで、各地でスポーツ大会などが催されます。

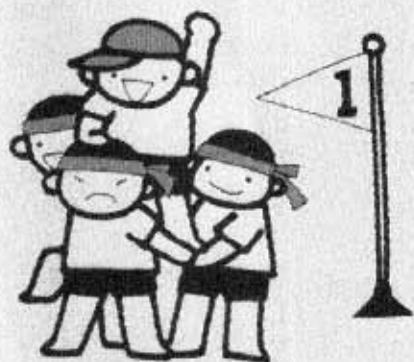
高校野球は、真夏のイメージですが、開催が八月ということで「秋」に含まれます。

運動会

甲子園（高校野球）

すすきのほくしゃみしそうなお月さま

東山 奈央



稲刈り・新米・栗ご飯

実りの秋、青々としていた田圃も黄色に変わり、稲穂も重そうに頭垂れます。新米の季節。お米が一味変わります。栗入りご飯やおこわがまた格別ですね。



虫時雨

こおろぎ・キリギリス

赤とんぼ

木の実・イチジク
ぶどう・あけび・

クルミ
柚・芋・銀杏・

南瓜

落ち穂・大豆・葛
秋茄子・とうもろ

こしきのこ・稲・

栗・桃の実・梨・
レモン・柿椎の実

・どんぐり

落花生・スイカ
もみじ

虫たちの大合奏。

童謡「虫の声」に出てくるような虫たち。彼らの声を聞くと確実に秋が近づいていることがわかります。

夏場は高地で過ごし、秋になると里におりてきます。

(秋になるとよく見る虫で俳句を作るのもいいですね。)

木の実やキノコ類がおいしい季節。まさに「実りの秋」ということばがにこみます。

「芋」は主に「里芋」をさします。

お月見に供えたりする里芋の皮をむかずゆでたもの「衣被ぎ」も秋の季語です。端を切り落とし指で絞り出すようにして塩（辛子醤油も可）をつけて食べます。

スイカも意外なところで秋なんです。俳句の世界にはこういったことがたくさんあります。



赤とんぼ父のかたにも止りけり

大久保綾香

星・月
天の川・月・月夜
流れ星

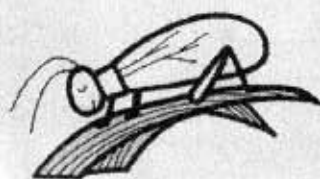
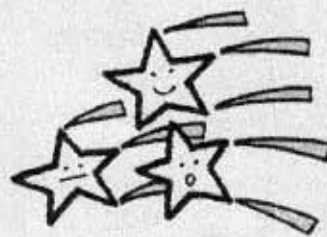
台風・露・霧・秋
の雨・秋晴れ・秋
の空・鱸雲

秋は、空気が澄んでよく見えるようになつてきます。月は、名月、無月、十五夜、十六夜など様々な表現がされます。

空を仰げば、いつしか空が高く、入道雲に代わって鱸雲が横たわっていることがあります。心なしか暑さが和らぐ気がします。

星涼し父と観察どこまでも

蜂須賀信三



寄せ鍋なべ

おでん・雑炊ぞうすい

湯豆腐

毛糸編む

手袋・セーター

マフラー・綿入れ

コート

毛皮

ダウン

ブーツ

スキー・スケート

スノーボード

寒稽古かんげいこ

雪かき

雪だるま

雪の窓けいとこのぼうしが笑ってる

菊山 裕佳子



寒いときは鍋料理が一番。鍋から上
がる湯気、熱いものをふうふういい
ながら食べる、冬の食卓の姿です。
冬、セーターやマフラー、手袋、帽
子といったものを編む姿は、心まで
温まる気がしますね。
地域によって「はんでん」「ちゃん
ちゃんこ」というところもあります。
ダウン(羽毛)を使ったジャケット
やベスト。
皮の長靴ながぐつです。
冬の代表的なスポーツです。
スノーボードのことで、九〇年代後
半頃からはやりだしました。
寒風吹きすさぶ中、行われる柔道な
ど武道の練習です。
雪が降るとなぜか楽しくなって駆け
回りたくなりますが、遊んでばかり
もいられません。生活上、除雪作業は
大切な仕事です。除雪した雪を集め
て、かまくら、雪だるまを作ります。

七五三の祝

冬休み

年の暮れ

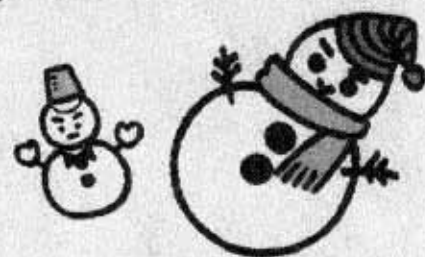
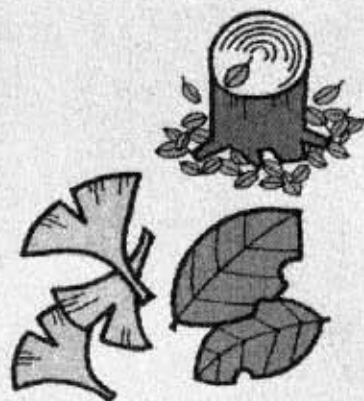
クリスマス

サンタクロース

紅白歌合戦



十一月十五日に、子どもの成長を祝
います。
年末・年始にかけての学校の長いお
休み。クリスマス、大晦日おおみそか、お正月、お
年玉といった楽しみがいっぱいあり
ます。
クリスマスの前夜(イヴ)に子ども
たちにプレゼントを運んでくれると
いう伝説の人物。
(他にもクリスマスにかかわる言葉
を季語にして俳句を作るのもいいで
しょう。)
大晦日恒例こうれいのテレビ番組です。この
番組が終わるとまもなく新年になり
ます。



冬眠

落ち葉

蜜柑

クマなどの動物が、実りの秋のうち
にたくさん食べ、皮下脂肪をいっば
いつけて、春が来るまで穴蔵で眠り、
冬を越します。
冬は植物たちが、春を迎える準備を
します。見た目はさびしいですが、
古くなった葉は落ちても、春に新芽
を出す準備をします。
秋ごろから出荷されますが、冬の蜜
柑が一番甘くておいしいです。炬燵
に蜜柑、日本の冬には欠かせません。

落ち葉見てパッチワークで着てみたい

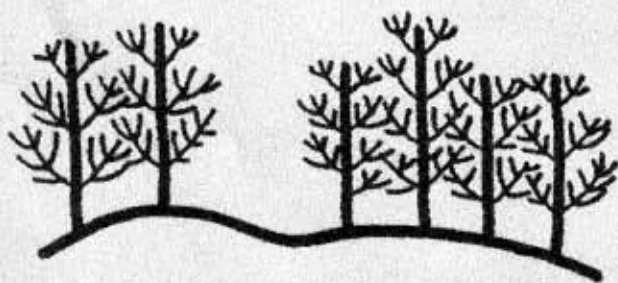
田矢 早保

木枯らし・北風

霜柱
雪
霰
霰

冬の風にもいろいろありますが、どれ
も冷たく身にしみるものばかりです。
雹よりは柔らかい氷混じりの雪(氷雨)。
雪まじりの雨。

土中の水分が凍てつき、表面を持ち
あげる現象。最近、アスファルト
やコンクリートに覆われて、霜をふ
む体験ができにくくなりました。



(参考) 歳時記

他にもたくさん季節のことばがありますが、主なものをぬき出しておきます。俳句を作るときに役立ててください。

新年(一月)

☆時候・行事

出初でぞろ

年の初めに消防の初練習をすることをいいます。「出初め式」のことです。

☆遊び・生活

おせち・鏡餅・雑煮雑煮

お正月に一家そろっておとそをのみ、お雑煮やおせち料理を食べて新年をお祝いします。おせちの料理には新年にふさわしい意味があります。

初句会・初湯・初夢

新年になって「初めて」することです。

七草がゆ

七種の植物を入れたお粥で七日に食べます。お正月に食べ過ぎたお腹を休めるためのようです。(若菜)

☆動物・植物

福寿草

葉に先立って鮮やかな黄色の花をつけます。名前もおめでたいですね。

若菜

七種(セリ・ナズナ・ゴギョウ・ハコベラ・ホトケノザ・スズナ・スズシロ)をまとめていう言葉です。

シダ・裏白

裏白は、「夫婦共白髪になるまで長生きしよう」という意味をこめて、鏡餅に飾ります。

別称
ハコベラ：ハコベの

☆自然

初明かり

元旦の早朝さしてくる太陽の光のことです。

春(二月～四月)

☆時候・行事

春

春そのものや、月名(旧暦名)：如月・二月、弥生・三月、卯月・四月も季語として使われます。

立春

節分の翌日が立春で、暦の上ではここからが春になります。

早春・春浅し

立春後、二月いっぱいのことをいいます。

春寒し

立春後の寒さのことです。

春めく

春らしくなることです。

彼岸

三月二十日ごろ。一日の昼と夜の長さが同じになる(春分の日)前後三日間をいい、お墓参りに行きます。単に「彼岸」といえば春の季語で、秋は、「秋彼岸」といいます。

日永

春分を過ぎると一日一日に日が長くなります。

花の山・花見・花祭

花といえは、桜をさし、花見に行くのは、春の楽しみの一つですね。最近はそのころの祭りを花祭といえます。京都の平野神社・大分の宇佐神宮中祭が有名です。

うららか・のどか
花冷え
八十八夜

春の日の様子です。気持ちがとてもいいものです。
桜のころの冷え込みをいいます。
立春から八十八日目をいいます。――▼(茶摘)

☆遊び・生活

初午

お水取り

遠足

耕し・種蒔き

田植え

茶摘み

潮干

草餅

二月初午の日。初午祭が行われます。

三月十三日未明、奈良東大寺二月堂で行われる修二会の中の行事です。おたいまつともいわれます。お水取りが来ると「春が来る」といわれています。

春の行事の楽しみの一つですね。

春先に冬の間に固くなった田畑の土を打ち返し、種をまきます。

昔は、一つ一つ手で植えていました。今は機械化され、ずいぶん楽になりました。

八十八夜から摘み始め、十五日間に摘まれたものを一番茶といいます。

旧暦三月三日ごろの大潮は、干満の差が大きく遠くまで干上がります。潮干は、干潟の意味も潮干狩りの意味もあります。春の貝は、身が大きくお味噌汁の具には最高ですね。

蓬の葉をひきこんだ餅のことです。

☆動物・植物

鶯・初音

鳥帰る・帰る雁

鳥雲に

雉

雲雀

さえずり

若鮎

蓬・土筆・芹・独活

ぜんまい・わらび

夏蜜柑・蔞の羹・木蓮

葱坊主・蒲公英・蓮華

ホーホケキヨと鳴き、初めて聞く声を初音といいます。春告鳥ともいいます。

春、渡り鳥が帰ることをいいます。

帰る鳥が雲間に消えて見えなくなることで、日本にしかない鳥で、普通は、ケンケンと鳴きます。

春の高空に垂直に舞い上がりさえずります。

春の繁殖期に小鳥がしきりに鳴くことです。

若い鮎。春先、川を上って来るのが小鮎です。

春になって一斉にふく木の芽。新芽を見ると、春を感じずにはいられません。どれも皆、食用です。昔は、子ども連れで取りに出かけました。和物やおひたしにして食べます。

春は、動物では産卵や出産の時期になります。植物では、一年中でもっとも花の多い季節です。

野山をはじめ、学校の花壇にも様々な花が咲き乱れますね。まるで、新学期を迎える皆さんを祝

福しているかのようです。

雪解け

残雪

春の雪

薄氷

流水

春雨

春の日

春の月・春の星・春の海

霞

陽炎

おぼろ

花曇る

山笑う

水温む

暖かくなると冬の間に雪が解け始めることをいいます。

春になっても残っている雪のことです。

春になってから降る雪のことです。

うっすらと張る氷。「うすらい」ともいいます。

北極海からオホーツク海沿岸などに漂流してくる氷のかたまりです。これに乗って北極の動物がやってくることもあります。

しとしと降るのが「春雨」で、その他の雨は、「春の雨」といいます。使い分けが難しいですね。

どことなくおだやかでのどかなようです。

急激な気温の変化で、水蒸気が立ちこめ景色がぼんやり霞んで見える様子です。

春の良く晴れた日、地上から水蒸気が立ち、物の形がゆらいで見えることです。

大気が水蒸気を含んでぼんやりと見える様子です。

桜の咲くごろの曇り空をいいます。

草木の芽吹き始めた淡い色合いの春の山の形容。まるで、山が笑っているようにその色合いから見えますね。かわい表現です。

春の日差しで温かくなった水のことです。

夏（五月～七月）

☆時候・行事

夏

立夏

初夏・夏めく

夏至

暑し・灼く

土用

麦秋

秋近し・晩夏・涼し

祇園祭

夏そのものや、月名(旧暦名)・皐月・五月、水無月・六月、文月・七月も季語として使われます。

五月六日ごろ、暦の上ではここから夏になります。

夏らしくなってくることを「夏めく」といいます。

六月二十一日ごろ、一年の中で昼の時間が最も長い日。この日を境に、徐々に日は短くなっていきます。

気温の高いこと・燃えるような暑さをいいます。

土用の丑に、うなぎを食べると夏ばてしないといわれますね。また、土用を過ぎると海の波も高くなってきました。海水浴に行くときは気をつけましょう。

麦の刈り入れ時、秋のように麦畑が黄色になるのでこの名前がついたそうです。

夏が終わり、秋が間近に感じられます。

七月一日から一か月、京都八坂神社の祇園祭が有名です。京都以外でも、それにならって各地に

祇園祭があります。

新茶
筍飯
更衣

新芽を摘んで作ったその年最初のお茶。味わい深くいい香りがあります。筍を炊き込んだ飯。いかにも初夏の味わいです。

袋掛け

春の衣服を夏物にかえます。気分が一新されますね。

梅干

りんご・梨・桃の果物を鳥や虫から守るため一つ一つ袋を掛けることをいいます。塩付けの梅を真夏の強い日に干します。

夜釣り

夜魚つりをすることです。

鵜飼

鵜の首に縄をつけ、鵜がつかまえた鮎をはかせて取る漁。長良川の鵜飼いが有名です。

避暑

盆休みなどを利用して、故郷に帰ることです。暑さを避け、涼しい所で過ごすことです。

☆動物・植物

閑古鳥

カッコウと鳴く鳥です。昔から「ほととぎす」と混同して呼ばれてきました。

時鳥

閑古鳥とよく似ていますが、鳴き方は「テツペンカケタカ」と聞こえるようです。

青鷺

山女は、鮎より上流にいる日本特産の溪流魚。

鯉・鮎・蟹・山女

初夏の木々の新しい葉を若葉といっています。

若葉・新緑・新樹

白鷺が飛ぶような姿の花をつけるのが鷺草です。

青葉・万葉・みどり

炎天下、夏草のしげりがむせかえることをいいます。

鷺草・百日紅・蓮の花

草いきれ

☆自然・天文

五月晴

梅雨の中休みの晴れ間をいいます。最近では、五月中の晴天のことをさします。

西日・日照り・炎天

西に傾いた太陽を西日といい、太陽が照りつける燃えるような空を炎天といっています。いかにも、夏の暑さを感じます。

青嵐・風薫

青葉のころ、青々とした林や野を吹きわたる風で、青葉が匂うように吹きわたる南風を風薫といっています。

南風

高温多湿の夏の季節風のことです。

朝曇

夏の朝、もやをかけたように曇ることをいいます。

雲の峰

入道雲のこと、青空にぐんぐんと勢い良く伸びる様子は山の峰によく似ていますね。

青田

一面に青々とした田をいいます。

夏の間

高山では雪渓が残り、雲海が見られます。

「かんこどり」ともいわれる。

溪流：谷川の流れ。

秋（八月～十月）

☆時候・行事

秋
立秋

残暑

二百十日

夜長

秋彼岸

朝寒・夜寒・さわやか
秋めく・秋深し・秋の

暮れ・行く秋・冷ややか

お盆（盂蘭盆）

墓参り・灯笼流し

終戦記念日

石取り祭・地藏盆・

盆踊り・秋祭り

盆踊り・秋祭り

☆遊び・生活

案山子

菊人形

☆動物・植物

秋の蝉

蜘蛛・法師蝉

糞虫

渡り鳥

秋そのものや、月名（旧暦名：葉月・八月、長月・九月、神無月・十月）も季語として使われます。月の初め頃から秋の気配が感じられることがあります。

（小さな秋を身の回りからさがしてみましよう。）

暦の上で「秋」といわれても、まだまだ暑い日ばかりです。

節分から数えて二百十日目をさします。

冬至までどんどん昼が短く夜が長くなっていきます。

彼岸は年に二回あります。春（春分の日前後）と秋（秋分の日前後）です。俳句では秋の場合は、

あえて「秋彼岸」といいます。この日を境にどんどん日が短くなります。

残暑が厳しい時でも、朝夕の涼しさに秋の気配を感じることがあります。さらに、秋本番を迎え

ると、いろいろ秋を表現する言葉が生まれてきます。

八月十五日あたりを一般に「お盆」と称して会社などもお休みになるところが多いです。主に、

仏教の考えから来ている行事です。

灯笼を川に流して死者の霊を送るとされています。

八月十五日（一九四五年のこの日に第二次世界大戦の終結をむかえました。）

（住んでいる地域の行事なども俳句の季語として詠みこむのもいいですね。）

春に行われるところもありますが、秋の代表的な行事です。

刈り入れ前の稲を、雀などから守るために、人を真似て作った脅し用人形。

（最近では、きらきら光るテープや、目玉のお化けみたいな風船や、鉄砲の音が出るしかけのものもあります。）

秋を代表する花の一つに菊があります。その菊をあしらってお人形の衣装を作ります。

蝉といえは夏のイメージそのものですが、ヒグラシやツクツクボウシなどが力尽きて地面に落ち

ている姿を見ることがあります。

雌はミノガになりますが、雌は一生糞の中で過ごします。

秋になると渡ってくる鳥が渡り鳥です。鳥の名前も季語になります。

秋刀魚
鮭・落ち鮎

秋の七草

☆自然・天文

文字通り、「秋」には脂ものつて美味しくなる「刀」のように光っている「魚」ということで、「さんま」です。鮭の遡上。産卵時期を迎え生まれ故郷の川に戻ってくるのは有名ですね。でも、戻ってこられる鮭はごく一部だそうです。途中幾多の試練を乗り越えられたものだけが子孫を残すことができますね。
秋・尾花(すすき)・葛・撫子・女郎花・藤袴・桔梗もしくは朝顔を秋の七草といいます。

稲妻

野分

天高し・秋風

秋の海

水澄む

花野

山装う

稲妻は五穀豊穣に欠かせないものです。雷が落ちるのは怖いですが、空気中の窒素を土中に返す大切な役割があるそうです。
野分は秋になると吹く強い風です。

夏の海とはうって変わって人影も少なく、どこか哀愁漂ういいことばですね。

秋の草花の咲き満ちた野原。

秋は紅葉で山が錦に飾られおめかしをしたように見えます。

哀愁：憂い

冬(十一月～十二月)

☆時候・行事

冬

立冬

初冬

芭蕉忌

小春(日)・小春(日和)

冬至

柚子湯

年惜しむ

大晦日・ゆく年・除夜

大掃除

餅つき

年越しそば

冬そのものや、月名(旧暦名：霜月・十一月、師走・十二月)も季語として使われます。

十一月七日・八日ころ、暦の上で冬をさします。十一月は冬というより秋真つ盛りという感じですが、このころから、節分までを冬とします。

俳聖芭蕉翁の命日。「時雨忌」旧暦十月十二日にあたります。

十一月頃でも春のような陽気の日がたまにあります。春の語が使われていますが、冬に春みたい

な日のことを表現することばなので冬の季語になります。

一年の中で一番昼の時間が短い日。この日を境に、徐々に日は長くなっていきます。(↑夏至)

冬至に柚子を入れた風呂に入ると風邪をひかないといわれています。

一年の最後の日。(普段の月末は単に「晦日」という。)大晦日の夜から新年にかけて突かれる鐘

を除夜の鐘といえます。

一年の埃を払って、新しい気分で新年を迎える準備です。

お正月用の飾りと、お雑煮用に餅をつきます。

☆遊び・生活

風邪

湯冷め

息白し

日向ぼっこ

襖

煤払い

歳暮

年忘れ

空気が乾燥していると、喉の粘膜が乾いて、ばい菌・ウイルスが入りやすくなり、風邪をひきやすくなります。特に、お風呂上がりの油断が禁物です。体温と気温の差で吐く息が白く見えます。

座敷を区切る引き戸。「からかみ」ともいいます。

奈良の大仏様のすす払いがよくテレビニュースでながれます。一年の埃を払います。歳の暮れ。この時期、お世話になった人へ贈る物を「お歳暮」といいます。この一年の苦勞を忘れてしまおうという目的で開かれる忘年会のことです。

☆動物・植物

鷹・水鳥・鴨

海の物

河豚(鮫)・鯨

牡蠣・鱒

冬の花

水仙

葉牡丹

冬野菜

大根・白菜・ねぎ

冬の代表的な鳥。水鳥の中には冬に渡ってくる白鳥も含まれます。鴨は、鍋にすると、体も温まり、とてもおいしいです。

年中いますが、冬が一番美味しい時期を迎えるものです。お鍋や刺身が最高です。(他にも冬においしい海のものをおさがしてみるのもいいですね。)

冬にも咲く花はあります。寒い中ががんばって咲いている姿に心動かされることがあります。

新年を迎える準備に門松があります。花の少ない時期、花に見立てて門松に添えられる植物キャベツを觀賞用に改良したものです。

冬に旬を迎え、鍋料理や、保存食に欠かせない野菜です。

ネギは苦手な人もいますが、体を温め、風邪の予防にもなります。麵類に刻みネギがよく合いますね。

☆自然・天文

雪起こし

時雨

風花

氷柱

枯れ野

山眠る

この風が吹くと雪が舞うとされています。

降ったりやんだりする冷たい雨。

遠くの地で降り積もった雪を風が運んできて、ひらひら舞う様子です。軒下に雪解け水が凍ってできる氷の柱です。

枯れ木、枯れ草の広がる山野。

まるで、山が冬眠でもしているかのように静かな様子をいいます。